第6章　文化財の保護と研究整備に関する若干の問題

Ⅰ　遺跡の破壊の状況と経過
Ⅱ　遺跡の名称に関するいくつかの問題
Ⅲ　遺物の活用の在り方についての提言
Ⅳ　官民一体の調査体制づくり
Ⅴ　空港建設に係る環境評価準備書について
Ⅵ　白保周辺の遺跡について
Ⅶ　アンパルを守れ

Ⅰ　遺跡の破壊の状況と経過(1)

砂採取を中心とする開発が進み、八重山の歴史を知る手がかりになる貴重な遺跡が破壊されている。考古学を学び、歴史を研究する者にとって心が痛む。消滅寸前の遺跡や全壊の遺跡があまりにも多い。とりあえず一九八〇年頃の石垣島の遺跡に限ってみると遺跡破壊の原因には次のようなことが挙げられる。なお遺跡名の項に、記録保存とあるのは、発掘終了後に調査報告が作成され現地では消滅したことを意味する行政上の用語である。

(1)　ほとんどの遺跡において、ブルで畑整地が行われた後、トラクターによる耕起などで包含層が撹乱されている。

（列記省略）

(2)　建築資材用の採砂や盆栽用の採土、埋土などで砂丘にある無土器時代やスク時代の貝塚が破壊され、なかには消滅した貝塚もある。

イ．冨崎貝塚（消滅）、ロ．冨和底貝塚（大部分破壊）、
ハ．名蔵貝塚群（一部記録保存）、ニ．神田第二貝塚（消滅）、
ホ．名蔵白水貝塚（消滅）、ヘ．川平大兼久貝塚（消滅）、
ト．川平ザンドウ原貝塚（消滅）、
チ．仲筋ピューチィタ川河口貝塚（調査済）、
リ．平久保ジーバ川河口貝塚（消滅）、
ヌ．嘉良嶽貝塚群（全壊）、ル．白保遺跡（消滅）、
ヲ．舟蔵遺跡（消滅）、ワ．舟路川河口遺跡（消滅）

(3)　建築用の骨材の為、採石により破壊された遺跡

イ．石底山遺跡（一部調査）、ロ．大浜フルスト原遺跡（調査）、
ハ．宮良チビスク遺跡（消滅）、ニ．宮良クバントゥ遺跡、
ホ．ペーフ山〈桃里恩田〉遺跡（調査）

(4)　宅地造成により破壊された遺跡

イ．山原貝塚（記録保存）、ロ．川花第一遺跡（一部破壊）、
ハ．川花第二遺跡（一部破壊）、ニ．川花第三遺跡（一部破壊）、
ホ．平得宇部御嶽遺跡（一部破壊）、
ヘ．平得ウイスズ村遺跡（記録保存）、ト．仲筋貝塚（一部調査）

(5)　墓地造成により破壊された遺跡

イ．平得ウイスズ村遺跡（記録保存）、ロ．川花第一遺跡（一部破壊）、
ハ．川花第二遺跡（一部破壊）、ニ．川花第三遺跡（一部破壊）

(6)　道路拡張工事による破壊

イ．山原貝塚（記録保存）、ロ．クードー貝塚、
ハ．名蔵神田貝塚（記録保存）、ニ．船越貝塚（記録保存）

(7)　圃場整地による破壊

イ．平得仲本村遺跡（記録保存）、ロ．アラスク村遺跡（調査）、ハ．ウフスク（大城）村遺跡（記録保存）、ニ．竿若遺跡（消滅）、ホ．竿若東遺跡（記録保存）

昨今、八重山の島々は開発ラッシュである。貴重な遺跡が、土地改良事業、公園、宅地・墓地造成、採石、採砂、リゾート地、ゴルフ場、新空港建設といった開発の名のもとに、今まさに葬り去られようとしている。

貝塚や遺跡は古代人の生活総体の場であり、八重山の古代文化の解明に不可欠である。このような貴重な貝塚や遺跡の大部分が破壊され、または、消滅寸前であることは、八重山の古代文化の解明に大きな空白（欠落）を残すことになる。

それ故に遺跡を大切に保存することと、開発の際には最低限のマナーとして遺跡の一つひとつの記録保存をしっかりと行うこと、また、遺跡の説明書や標注の設置、文化財パトロールの実施強化、石垣市独自の埋蔵文化財の指定や分布調査などを行うことなどが必要である。

Ⅱ　遺跡の名称に関するいくつかの問題

沖縄県教育委員会の報告書『石垣島の遺跡』（一九七九年三月）の報告書の遺跡名と対比して文献や伝承などに登場する村名、地名をあげる。

・『石垣島の遺跡』　　伝承などにみられる村名

① 仲本御嶽遺跡 …… 仲本村遺跡
　伝仲本村跡遺跡群 …… 宇部御嶽遺跡
② 伝アラスク村跡遺跡……アラスク村遺跡
③ カンドウ原遺跡……ウフスク（大城）村遺跡
④ 宮良第四遺跡……宮良下ヌ家敷遺跡
⑤ 宮良第一遺跡……宮良クバントゥ遺跡
⑥ 伝盛山村跡遺跡……盛山村遺跡
⑦ 伝仲与銘村跡遺跡……仲与銘村遺跡
⑧ 桃里恩田遺跡……ペーフ山遺跡
⑨ 伊野田遺跡……中マンゲー遺跡
⑩ 伝ウッツヌ村跡遺跡……元伊原間村遺跡
⑪ 伝久志真村跡遺跡……久志真村遺跡

⑫　伝花城村跡遺跡……花城村遺跡
⑬　吉野遺跡……嘉良遺跡
⑭　吉野貝塚……嘉良川貝塚
⑮　平野後方第二遺跡……元平久保村遺跡
⑯　ヤマバレー遺跡……元桴海村遺跡
⑰　伝仲筋村跡遺跡……仲筋村遺跡
⑱　伝屋良部村跡遺跡……屋良部村遺跡
⑲　伝崎枝村跡遺跡……元崎枝村遺跡

現行では行政の遺跡の命名は主として地名や原名（ハルナー）に基づいて行われている。地域の人々が親しんでいる名称に依らずに地名等を、便宜的画一的に用いているのである。また、前出報告書の伝〇〇村遺跡のほとんどが近世の集落である。石垣島では文献史料（『八重山島年来記』）や古地図（―手描きによる明治期の村絵図―）によって近世の集落跡をかなり正確に比定することができる。屋敷地・井戸・御嶽・抱護林・田畑・道・橋・村番所・鍛冶屋・学校・製糖小屋・水糖・村境、等々に至るまで、盛り込まれた情報は多岐にわたっている。したがって、遺跡には、しかるべき手続きを踏んで比定された名称を採用する方が歴史的意義も高いと、筆者は考える。地域の文化はその地域の住民が主体的に大切に保護継承しなければならない。それゆえにもし文献や伝承等から遺跡の地名が比定できるならば、それを遺跡名とし、無形文化財として大切に保護し、また、継承しなければならないと考えるが、いかがなものであろうか。

Ⅲ　遺物の活用の在り方についての提言

復帰後、沖縄県教育庁文化課を中心にして遺跡の発掘調査が頻繁に行われ、既に左記のように報告書が刊行された。しかし遺物については、沖縄本島へ移動し、調査終了後もそのままである。遺物の保管は現地主義を貫き、現地の博物館などで常時展示し活用すべきである。

①　『八重山石垣島平得仲本御嶽遺跡発掘調査報告』沖縄県教育委員会　一九七六年
②　『フルスト原遺跡』石垣市教育委員会　一九七七年
③　『八重山石垣島カンドウ原遺跡発掘報告』石垣市教育委員会　一九七七年
④　『沖縄石垣島ヤマバレー遺跡発掘調査概報』青山学院大学　一九七七年
⑤　『沖縄県石垣島吹通川河口遺跡の調査概要』沖縄県教育委員会　一九七八年
⑥　『竿若東遺跡緊急発掘調査報告』沖縄県教育委員会　一九七八年
⑦　『石城山・緊急発掘調査概報』沖縄県教育委員会　一九七八年

⑧『ナガタ原貝塚・船越貝塚発掘調査報告書』沖縄県教育委員会　一九七九年

⑨『石垣島県道改良工事に伴う発掘調査報告―大田原遺跡・神田貝塚・ヤマバレー遺跡・附編平地原遺跡表面採集遺物』沖縄県教育委員会　一九八〇年

⑩『名蔵貝塚群発掘調査報告』沖縄県教育委員会　一九八一年

⑪『大田原遺跡―沖縄県石垣市名蔵・大田原遺跡発掘調査報告書』石垣市教育委員会　一九八二年

⑫『沖縄西表島与那良遺跡発掘調査概報』青山学院大学一九八二年

など。

本県でも小・中・高校において、地域に根ざした歴史教育が問題にされており、生徒に郷土愛を育成することが課題となっている。かつて一九六〇年頃には西表島の古見小中学校、大原中学校などにはその地域で採集された遺物がかなりあって、地域の教材として活用されていた。今ではこれらの遺物が紛失している。地元の人たちの話では残念なことに先生たちが転勤の際に記念として持ち出したようだ。そこで、各小中学校や県立高校等の図書館、地域の公民館等に展示室を設けてはどうだろうか。勿論、遺物目録を作成して、管理も徹底しなくてはならない。考古学資料を地域史の教材として積極的に展示し、活用すべきである。また、行政調査の進展につれて、石垣市や県文化課でも発掘資料が増加し、遺物の保管場所に困るというような事態が生じている。調査後の資料は現地で保管し、地域住民の利用に供さねばならないとする、「資料の現地保管の原則」からしても、このような試みは首肯されるはずである。

Ⅳ　官民一体の調査体制づくり(1)

従来、遺跡の調査といえば中央の研究者や研究機関、行政等が行うのが常であり、地元の研究者は資料や情報の単なる提供者としての地位に甘んじて来た。

遺跡の調査が住民の税金と開発業者の負担でなされている以上、その成果が何らかの形で我々に還元されてしかるべきである。知的好奇心旺盛な少年少女は言うに及ばず、老いも若きも島の歴史や自らのルーツに関心を寄せる方々は多いと思う。調査結果の学術的意義や学校教育面での活用が強調されるのは勿論であるが、生涯教育の必要性が叫ばれる昨今である。学童以外の一般住民への啓蒙活動がもっと活発になされる必要がある。中にはより専門的な知識をもち、より高度な情報を必要としているアマチュア研究家もいらっしゃるだろう。一般から行政に寄せられる要求は益々多様化している。

また、遺跡や遺物は観光資源としての可能性を秘めている。八重山諸島が琉球列島のみならず我が国でも特有の文化をもつことは再三にわたって強調して来たところである。八重山の文化は黒潮の道を介して台湾、フィリピン、果ては太平洋の島々へと連なっている。歴史のロマンを通

じて、そうした地域の文化・学術交流を進めることができたら、それこそ島興し（地域振興）の一助となるであろう。

一九九六年四月に石垣市でも漸く文化課が設置された。けれども、文化行政の在り方についての具体案作りはまだまだこれからのようである。

ちなみに、沖縄本島の宜野湾市では文化課職員と市民有志が手を携えて積極的な文化財行政を展開している。文化財審議委員や地元の研究者を含む一般協力者を単なる情報提供者としてではなく、共同調査研究の助言者・協力者として位置付けているのがひとつの特長である

また、文化財の公開の原則に則り、発掘ニュースはもちろん、広報紙等でも広く住民参加を呼びかけ、遺跡の現地説明会や調査成果の展示会等の機会を設けて、地域住民の理解を得ながら積極的に文化財の保護行政を進めている。広く全国に目を配れば、参考になるようなモデル・ケースは更に増えるだろう。官民一体の原則の下にこれからの宮古・八重山の地区の行政調査のガイドライン作りが進められなくてはならないと考える。

文化財行政が優れた専門家によって担われるようになったことは歓迎すべきことである。けれども、その専門家が、学術性・専門性を重視する余り、地域住民の存在を忘れて権威主義に陥る懸念は無いだろうか。「素人に何ができるものか！」ではなく、「何だったら素人にもできるのか？」といった問題意識を行政関係者は今一度考慮された上で、今後の調査研究体制づくりを進められたい。

Ⅴ　空港建設に係る環境評価準備書[1]について

石垣島の東海岸、新石垣空港建設予定地であった白保の轟川川尻からカラ岳にかけては、海岸低地に面した砂丘上に形成された大規模な地点貝塚がある。復帰前の土地改良事業などにより破壊され、またその際に客土された。現在は採砂業者による大規模な砂採取や盆栽用の土取りなどが行なわれ消滅寸前である。かつての新石垣空港建設予定地には貴重な轟川川尻貝塚や嘉良嶽貝塚群などがあり、耕作のたびに、客土した赤土に混じって焼石や食料残滓の貝殻などが見られる。

嘉良嶽貝塚群は、筆者が「八重山石垣島の新石器時代無土器遺跡」（『南島考古』第四号沖縄考古学会―一九七五年九月）のなかで初めて公表した遺跡である。また、この遺跡は沖縄県教育委員会『石垣島の遺跡―詳細分布調査報告書―』沖縄県文化財調査報告書　第二二集（一九七九年三月）にも記載されている。

一九八六年二月一一日、職員会館で「空港問題を考える市民の会・命とくらしを守る女の会」主催の「島を語る市民講座と資料展」で、筆者は八重山の先史文化というテーマで、白保遺跡、轟川川尻貝塚、嘉良嶽

貝塚群などについて講演した。その中で、例えば鹿児島県教育委員会[2]は新奄美空港の建設用地内に貴重な遺跡が確認されたため一九八二年一月～八六年一〇月まで五年間かけて新空港建設用地一帯を綿密な調査をし、報告書を六冊出して開発と文化財との調和が計られる手だてが講じられているが、この新石垣空港建設に関しては、沖縄県教育委員会や石垣市教育委員会は建設地一帯に貴重な遺跡があるにもかかわらず放置状態で何故調査を行なおうとしないのかという疑問を投げかけた。

また、筆者は再度一九八九年七月九日、白保公民館にて魚垣の会第一回研究発表会で「白保周辺の遺跡」のテーマで講演をし、嘉良嶽貝塚群の重要性に理解を求めたりもした。[3]

現在この一帯では採砂業者による大規模な砂採取が行なわれている。それに関して石垣市教育委員会や文化財審議委員、県文化財保護指導員などに連絡をするが、なしのつぶてで破壊されるがままの状況で今日にいたっている。

文化財保護法には、政府及び地方公共団体の任務として第三条に、「政府及び地方公共団体は、文化財がわが国の歴史、文化等の正しい理解のため欠くことのできないものであり、且つ、将来の文化の向上発展の基礎をなすものであることを認識し、その保存が適切にいくように、周到の注意をもってこの法律の趣旨の徹底に務めなければならない」と記されているが、嘉良嶽貝塚群に限っては、文化財保護法の第三条の趣旨が生かされていない。

以前、石垣島一周道路の工事に際して、当計画路線付近の船越貝塚では、焼石、食料残滓の貝殻などの埋蔵文化財の存在が確認されたために、一九七九年に緊急の発掘調査が行なわれることとなり記録保存がなされた。

また、沖縄本島中部の泡瀬海岸の地に中城湾港（新港地区）を建設するにあたって、当地のリーフ内で貝塚時代の凹石が採集されたことなどから、リーフが原始時代の生業の場として人間生活の舞台になったことが認識され、工事着手以前に県教育庁文化課によって調査が行なわれ、その結果は『遺跡分布調査報告―中城湾港（新港地区）開発に伴う―』沖縄県文化調査報告書　第五五集（一九八三年三月）にまとめられている。

文部省の文化財調査官は、かつて石垣島の権現堂補修調査の際、「文化財は百分の一しか残っていなくても十分価値があります」と述べている。

轟川の川尻からカラ岳にかけての砂丘にある嘉良嶽貝塚群などの地点貝塚については、行政側は全く調査を行なおうとしないし、また『新空港建設にかかる埋立事業の環境影響評価準備書』（昭和六三年四月）にも沖縄県は一言もふれていない。

八重山の先史時代・スク時代の文化には、大陸の有土器文化（主として中国南部、台湾）、南方の無土器文化（フィリピン）、北方のスク文化（内地や沖縄〈グスク文化〉）などのユニークで豊かな文化をみることができる。また、日本文化の形成に影響を与えた南方文化の伝播の海上ルートの玄関口としても注目されている。

この数年間の乱開発により、数多くの貴重な遺跡や貝塚が破壊されている。その代表的な例が嘉良嶽貝塚群などの破壊である。このことは、最も憂慮すべき問題である歴史の欠落（空白）をつくることになり、後世に大きな悔いを残すであろう。

Ⅵ　白保周辺の遺跡について[1]

白保集落は石垣島の東海岸に位置し集落のまわりには、八重山の古代文化を知る上で貴重な遺跡や貝塚が数多くある。白保遺跡、轟川川尻貝塚、嘉良嶽貝塚群、カラ岳遺跡、カラ岳古墓群、竿根田原遺跡、真謝井戸周辺遺跡、白保の上ヌ村遺跡、ヤドゥムレー遺跡、ダンダ山遺跡、マシクナー遺物散布地、ウイズ遺跡、盛山村遺跡、桃里村遺跡、ペーフ山（桃里恩田）遺跡、ヤドゥムレー石器材料地、御嶽遺跡などである。

それらの遺跡には、大陸的な文化の要素（赤色土器時代）、南方的な文化要素（無土器時代）、北方的な文化要素（スク時代）などが見られ、日本文化の海上ルートの玄関口として、また、民族移動や交流ルートの架橋として注目されている。

しかし、これらの海岸寄りの遺跡や貝塚は、開発に際して記録保存のための最低限の調査すら行なわれていないのである。白保遺跡や嘉良嶽貝塚群、轟川川尻貝塚、桃里村遺跡、盛山村遺跡などがそうである。

マシクナー遺跡の散布地は轟川の中流の琉球石灰岩海岸段丘地帯にあり、スク時代（中世）の中国製の褐釉陶器や局部磨製石斧のみならずリュウキュウジカの化石が採取されている。この一帯は一万年以上前の旧石器時代の化石人骨が発見される可能性を秘めている。シカを求めた旧石器人がいてもおかしくないのである。

竿根田原遺跡はカラ岳の北側裾野にあって、宮良川上流、竿根田原丘陵先端部の洪積世の名蔵礫層上に形成されている。竿根田原の西をヤドゥムレーと呼び、その一帯のサトウキビ畑には石斧の素材である緑色片岩が手ごろに打剥されて無尽蔵にある。この竿根田原遺跡から緑色片岩を用いて刃部だけを研磨した粗造の石斧が数一〇点、柔らかい粘板岩で製作した石斧が一点、発見されている。そこには遺物包含層はなく、遺跡の立地場所や粗造の石斧などから見て約三五〇〇年前の赤色土器時代の祭祀遺跡と思われる。

二五〇〇年前頃、黒潮にのって漁撈を主とする南方的な文化（無土器文化）が入ってくる。カラ岳東南方の海岸寄り低砂丘には嘉良嶽貝塚群があるが、この貝塚は石垣島東海岸に現存する唯一の無土器時代の貝塚である。

この嘉良嶽貝塚群はかつては南端の轟川川尻から北端のカラ岳の南スムジ川にかけての道路に沿いに形成された砂丘（カニク地）の大規模な地点（列点）貝塚であったが、今日では大規模な土地改良事業や無分別な砂採取などで地形が凹地になったり、また、客土で埋められたりして地形は大きく改変されている。

一九八九年八月六日、魚垣の会のメンバーが嘉良嶽貝塚群の北端のスムジ川河口にある地点貝塚で貝殻の散布状況を調べるため五〇メートル

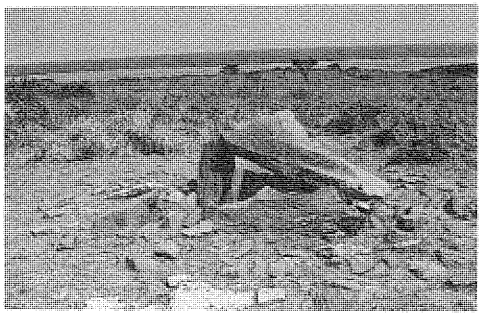


写真１　近世の箱式石棺墓

写真２　嘉良嶽貝塚群から採集された石斧を説明する
國分直一、白木原和美先生たち（1989年８月頃）

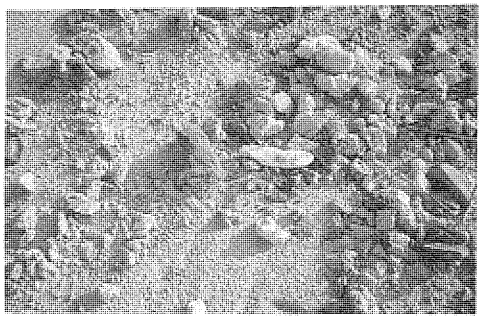


写真３　砂採取場の凹地から採集されたシャコガイ製貝斧

写真４　白保の海（撮影：小橋川共男氏）

四方の区画を約二メートル間隔に区切り、皆で並列して歩きながら人海戦術で地表調査を行った。

この調査の結果、ヒメジャコなど二四種類の海産貝やマングローブに棲息するシレナシジミが確認された。大型のヤコウガイ、オオジャコ、ヒレジャコ、スイジガイ、ホラガイなどの貝殻も多く、肉身の厚く美味な高級食用貝のウエイトが大きかったことが推測された。

この貝塚からは、焼石や食料残滓の貝殻、獣骨（イノシシ）などに混じって、局部磨製石斧、敲石、中国で使われた銭貨「開元通寶」（六二一年初鋳）一枚も発見された。また、隣接する南側の砂採取した凹地跡からシャコガイ製貝斧と打製石斧を一点ずつ採集した。

以上のような状況から、七世紀前半から八世紀にかけての無土器時代の住民は、海産資源の豊かな白保海岸の裾礁（イノー）に依拠した生活を送っていたことがわかる。

Ⅶ　アンパルを守れ[1]

石垣島の西海岸、名蔵川河口にはアンパルがある。そのアンパル周辺には、八重山の先史時代（赤色土器時代・無土器時代）、スク時代の貴重な遺跡、貝塚などが点在している。

クードー貝塚、名蔵貝塚群、浦田原遺跡、平地原遺跡、名蔵窯遺跡、神田貝塚、大田原（神田原）遺跡、神田第二貝塚、名蔵白水貝塚、白水洞穴遺跡、シーラ原貝塚、元名蔵村遺跡などである。

これらには、大陸的文化の要素（赤色土器時代）、南方的文化の要素（無土器時代）、北方的文化の要素（スク時代）などが見られ、日本文化の海上ルート（南方文化）の玄関口として、また、民族移動や、交流ルートの架け橋として注目されている。

さらに、アンパル一帯には、八重山、沖縄、日本文化のルーツを解明する指標となる最古の代表的な標式遺跡や貝塚がある。

とくに名蔵川のほとりにある大田原（神田原）遺跡は、八重山でこれまで発見された新石器時代の先史遺跡のなかでも最も古い約四千年前頃の遺跡である。

また名蔵貝塚群は、名蔵平野の氾濫原（低湿地）の砂台地に形成された地点貝塚であり、八重山における無土器時代の最古（二二〇〇年前）の貝塚である。

浦田原遺跡については、群雄割拠の（スク）時代、皆野宿岡の冨崎ガバネーと、ウラタバルの女傑ブナジルが、農作物収穫勝負（ムヌツクルシューブ）をし、ガバネーが勝ったという口碑伝承があるが、女傑ブナジルの館跡が浦田原遺跡だと言われている。

名蔵窯遺跡は、八重山で初めて一六九五年に瓦などを製造したところである。

これらの遺跡には、遺跡地を示す表示板などの標識すら設置されていない。

また一帯には乱開発などで破壊され、消滅した遺跡も数多くある。浦田原遺跡、白水貝塚、神田第二貝塚、シーラ原貝塚などがそうである。このような遺跡の破壊は、八重山の歴史を解明するうえで欠落（空白）をつくるのではないかと憂慮している。

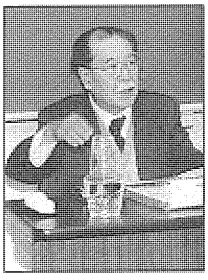
アンパル周辺に遺跡が多いということは、昔から人々の生活に最も適した場所だったからだと思う。石垣島に初めて、人間が住むようになった所だと信じられているアンパル。我々の先祖は、この風景をどのように見たのだろうか。このアンパル周辺を、自然文化公園にして、歴史、自然、文化、を学べるようにしたらどうか。アンパル野鳥研究会の皆さんと筆者は、そのように提言する。[2]

あとがき

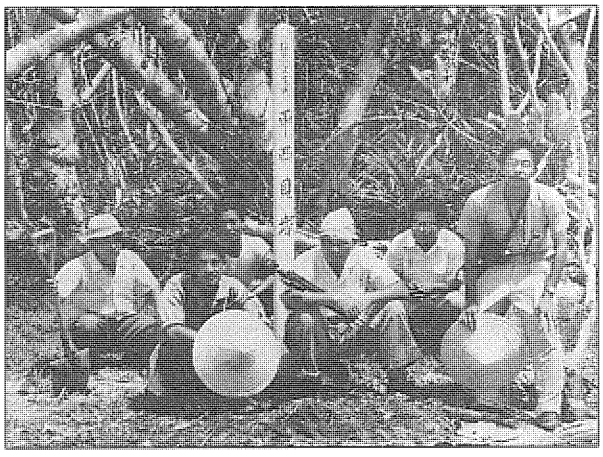
小学六年（一九五六）の頃、石垣小学校の校庭からきれいに磨かれた固い手頃な石を一点拾った。[1] 八重山においては宮良賢貞先生がそういった方面でご研究をなさっていると聞き、早速先生のお宅を訪ね先生に石を見せると、昔の人々が使った石の斧だと教えてくれた。これが先生との最初のご縁だった。当時は道が舗装されておらず、特に雨あがりや台風の時などには、石斧などが露顕していて学校に通う道路から随分と拾った。桃林寺後ろの三号線を東へ、宮良殿内まで歩きながら、緑色か、黒っぽい石を見つけては、掘り起こしてみると間違いなく石斧だった。石斧は丹念に磨かれていた。その頃二〇点ほど拾った。[2]

地元出身の早稲田大学総長大浜信泉先生の肝入りで八重山学術調査団が結成され、団員たちが八重山へ調査に来た時は私は中学二年生であった。石垣島の山原貝塚の発掘調査が始まることを新聞で知り、早速友人の宮国進吉君に相談し、宿舎の八洲旅館を訪ねて団長の滝口宏先生に発掘調査への参加をお願いしたら快く承諾して頂けた。

山原貝塚は測候所の東で登野城の村はずれ（現在の国家公務員宿舎の南西）にあるスク時代（日本史の中世に当たる）の集落跡である。まず大川清先生から発掘のやり方を教わり、移植ゴテを手に丹念に土を剥ぎ取っていくと琉球石灰岩の石を円形に配列した住居跡がくっきりと出てきた。骨でできたモリ、ヘラ、縫針、オトメイモガイで作った首飾り、石ノミなどを掘り当てると、「今日のバナナ賞」ということで休憩時間にバナナを一つ多く食べることができた。出土する遺物の一つひとつが珍しく、玉口時雄先生や西村正衛先生、大川清先生らによく質問をした。台風の接近という悪天候であったが、あっという間の充実した一週間だった。



大学で講義をする
大川清先生



平西貝塚にて、左から多和田真淳、玉口時雄、一人おいて
滝口宏、浜名厚の各先生（1959年）（写真提供：大川清先生）

調査終了時にアルバイト賃としてお金が渡されたが、むしろ勉強になったし、宮国進吉君と相談し、「このお金で考古学の本を送って下さい」とお願いした。大川清先生は、「分かった。それでは本を送ることにしよう」と約束してくれた。[3] そのことがきっかけになって、早稲田大学八重山学術調査団を中心に八重山の子どもたちに本を送る運動が起こり、[4] 本土から八重山の島々の小中学校へ本が送られた。

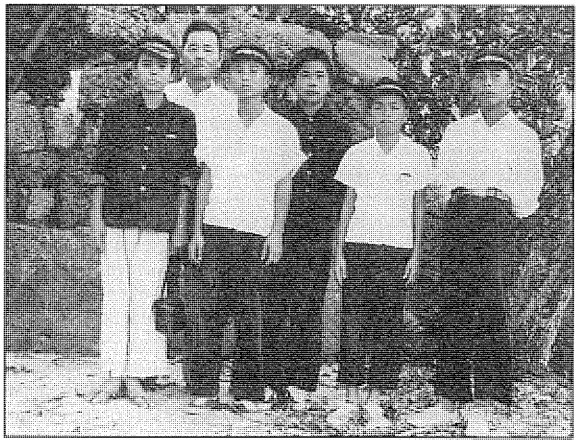
また、早稲田大学八重山学術調査団による山原貝塚の発掘調査への参加が縁で、八月下旬頃、宮良賢貞先生に相談して考古学の研究グループ[5]を作ろうということになった。

グループの名称は、W・I・O考古学研究グループ。早稲田大学の「W」、石垣市の「I」、大浜信泉早稲田大学総長と大川清先生の頭文字「O」を取って名付けた。指導を郷土史家宮良賢貞先生にお願いし、活動の場所を琉米文化会館とした。当時文化会館に勤務していた宮良高弘先生（現在札幌大学教授）がいろいろと便宜を図ってくださった。早速、学校内で会員募集のポスターの掲示や呼びかけを行ったら大谷英次、田場常男、浦崎邦夫、三木勝、高嶺方昭、大浜隆、玉那覇養秀、新庄俊和、大浜高伸君らが入ってきた。[6]

早稲田大学からは滝口宏先生の著書『古代の探究－現代の考古学』や大川清先生の著書『日本美術のおいたち』などの考古学の本が一一冊送られてきた。みんなで回し読みをしたり学習会をもったりした。

W・I・Oのメンバーはさしあたって各村々の歴史を知ることが大事だということで、八重山研究の父といわれる喜舎場永珣先生宅をよく訪ねた。永珣先生と私は永の名乗頭のつく嘉善姓一門（沖縄諸島では門中という）なので気軽に話せた。私たちの足音を聞くといつもふすまの中から独特の咳払いをなさった。先生は古い元村などを地図に描いたりして教えてくれた。先生の言われるところを訪ねて行くと必ず集落の跡があった。フルスト原遺跡、平得ピーラ池遺跡などの集落跡からは土器や中国製の陶磁器などを採集した。研

山原貝塚にて（1959年８月）
（写真提供：大川清先生）



山原貝塚の調査を終え、美崎御嶽にて宮良賢貞先生を囲んで。左側から４番目が筆者（1959年10月）

究グループの面々は名蔵貝塚群などの新石器時代無土器文化の貝塚やスク時代の遺跡を次々と発見した。調査はほとんどが手作業・手弁当・徒歩での調査だった。一九六〇年八月一五日、郷土の社会活動家長間正吉氏の案内で四ヵ村の発祥地といわれる石底山遺跡を試掘調査した。また、遺跡を訪ねる際に知りあった大浜中学校の細川泰昭、上間光明、前山田三男君らも研究グループに入った。彼らと合同で川平村跡調査なども行なった。石垣島はもちろんのこと、西表島や小浜島、そして、竹富島の島々をフィールド踏査し、各島々の中学生と意見を交換したり一緒に共同調査を行ったりした。

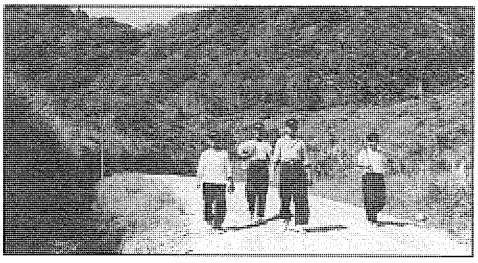
中学三年生になって学校では社会クラブを結成した。二、三〇人クラブ員がいたが、そのなかに三年生には粟盛哲夫、湧川（美底）たずこ、新垣（糸数）幸子、一年生に内原英和、遊佐正克、古波蔵大僖、永田晃、花城吉治、川満恒徳、大浜長照、黒島健、新城剛、比屋根力、島仲栄秀君らがいた。夏休みには、徒歩で石垣島一周調査を行ない、九月になってこれまでの成果を文化会館で展示したり、講話会を持ったりした。[7] 高校に入ってからもグループは継続され、[8] 与那国島や西表島西部から東部へのルートに沿った調査などを行った。

一九六〇年頃から沖縄は、黒潮文化の表玄関として注目されるようになっていた。その頃に来島した多和田真淳先生と出会うことができた。その後、一九六一年には國分直一先生、金子エリカ先生方をビロースク遺跡や名蔵貝塚群、神田貝塚へ案内した。ジョージ・H・カー博士やリチャード・ピアソン氏を石底山遺跡、名蔵シタダル海底遺跡、神田貝塚などへ案内したこともあった。このようにその頃多くの先生方との交流があり、勉強することができた。

その後四年間の東京での大学生活を終え、教員としての最初の赴任校は沖縄本島北端の辺土名高校だった。そこに学友安里嗣淳氏がいた。安里氏に誘われて国頭村の宇佐浜貝塚

発表会（1960年９月）

近世の仲筋村跡調査
（1960年８月31日～９月３日）



徒歩での石垣島一周調査（1960年８月）

などを見たりした。

一九七二年四月、地元の八重山商工高校に転勤した。新聞の異動者名簿で私の名を見つけた宮良賢貞先生が訪ねて見えて、私に市文化財審議委員になれと強く勧められた。八年ぶりに先生にお会いしたその日に、右も左もわからないままに文化財審議委員を引き受けることになってしまった。

復帰後の八重山は本土並みに開発が進み、遺跡破壊が進行していた。あわせて骨董ブームの中で、至る所で墓に供えられた陶磁器などが盗難にあったりしていたので、遺跡保護のために弄走せねばならなかった。沖縄県文化財保護指導員（一九七八年頃まで）なども引き受けた。開発によって破壊もしくはそのおそれのある遺跡については県文化課に連絡をとり、遺跡の保護や文化財としての指定に向けての要請や緊急発掘調査の依頼をしたりして保存の手だても行なった。連絡をとったほとんどの遺跡では、幸いにも、後に緊急発掘調査が行われた。

一九七五年一二月には、青山学院大学による宮古島での砂川元島遺跡の発掘調査を見学した。それが縁で、調査団の代表三上次男先生をはじめ、佐久間重男、吉田章一郎、田村晃一先生らと知り合うことができ、八重山での学術的な発掘調査を依頼した。そのことがあって、一九七六年一二月には元桴海村遺跡の発掘調査、翌年三月には同遺跡の第二次発掘調査、つづいて一二月に西表島東部の与那良遺跡、一九八〇年二月には西表島西部の成屋遺跡、そして一九八四年三月与那国島の与那原（ドゥナンバル）遺跡などの学術的発掘調査が行われた。

一九七七年の夏休みには私は奈良国立文化財研究所埋蔵センターの「埋蔵文化財発掘技術者研修会」の講習に自費で参加した。また、石垣島の標高一五〜二五メートルの等高線上の赤土の洪積台地を踏査した。その際、偶然にも名蔵湾に面したフーネ洪積台地末端か

元名蔵村跡の調査（1960年）

川平村跡の調査（1960年12月３日〜４日）

ピロースク遺跡にて金子エリカ先生を囲んで（1961年）

ら爪型文土器を採集した。それをきっかけに新田重清氏や安里進氏らと赤色土器文化の共同研究を開始し、その成果を沖縄タイムス紙上にて報告した。[9]（本書［付録］石垣島フーネ遺跡発見の土器に関する新聞発表論考「共同執筆」参照）

一九六五年頃から骨董ブームにより貴重な歴史的・文化的遺産が盗掘され、島外へと持ち出されていた。この調子で行くと、八重山の文化を研究するために、遠く日本本土、果てはアメリカにまで研究に行かねばならない事態がくるかもしれない、そのような危惧を覚えた。筆者は一九七八年七月、八重山地域の考古学研究者として多くの方々との共同研究を目的として先島文化研究所[10]を開設した。当研究所では遺物の公開を原則として、遺物の整理や発表を行い、韓国や台湾、フィリピンなどの踏査、広く東南アジアの研究書や文献などの収集を行ってきた。[11]

一九七九年には、八重山出土の古陶磁の様相の解明を目的として「仲筋貝塚」の学術的な発掘調査を企画・実施した。調査は地元主体、民主的な共同研究を基本に、手弁当での参加を有志に働きかけたら、陶磁器研究家関口廣次氏や早稲田大学大学院生（当時）の谷川章雄氏、東洋陶磁学会員中沢富士雄氏、沖縄国際大学学生（当時）阿利直治氏らが賛同してくれた。その外にも、趣意書や「発掘ニュース」を出して協力を呼びかけたら、ふかまわり会のメンバー（玉津博克、田原邦子、次呂久長英、与那嶺昌子）が発掘に加わることになった。調査は職場の異なる調査員が一緒に集まることができる唯一の時期である冬休みに行うこととし、同年の一二月二六日から翌年の一月六日までの一二日間実施された。

仲筋貝塚は、石垣島北海岸の川平湾を望む標高四〇メートル前後の丘陵の緩やかに傾斜する古砂丘上に位置している。調査の結果、土器を主体として中国製の貿易陶磁器（白磁、青磁、褐釉陶器）、鉄製品、石器類などが出土した。また、数点の染付、天目茶碗、銭貨の咸平元寶（九九八年初鋳）、元符通寶（一〇九八年初鋳）、勾玉、ガラス玉、石斧など

西表島浦内川にて（1961年）

名蔵貝塚の調査を終えて（1962年）

川平村の調査を終えて（1960年）

も採集された。遺物の整理は地元と東京で行われ、私は、食物残滓（貝殻など）の整理を行った。

川平村の古老たちから貝類の方言名を聞いたり、古環境の復元ということで川平湾や小島一帯を調査したら、当貝塚出土の貝殻の種類と現在の川平湾一帯に棲息する貝の種類とがよく一致しており、当時の貝類採集領域を推定することができた。特に注目すべきことは、宮古と八重山の交流を示す赤褐色の鉄粒子を含む宮古島系統の土器が出土したことである。また、鉄製品の製作に必要な砂岩製ふいごの羽口や鉄滓が採集されたことから、一五世紀頃には当遺跡内で鉄製品が生産されていたことが判明した。鉄製品の普及と併行して石器類なども使用されていたようである。中国製の青磁類の考察から、当貝塚は一五世紀中葉から一五世紀後半代にかけての短期間に形成されたことが推定できる。日本の中世に相当する沖縄のグスク時代（八重山ではスク時代）の集落跡であることがわかった。この調査の結果は参加者一同の協力を得て『沖縄・石垣島仲筋貝塚調査報告』[12]としてまとめることができた。

私は、八重山の考古学を研究する一方、八重山文化研究会に所属している。一九八五年、八重山研究の父「喜舎場永珣資料展」が開かれたときには実行委員の一人であった。そのとき、喜舎場永珣先生と同門である嘉善姓一門の方々から「ルーツを調べて欲しい」という多くの声が挙がった。私も嘉善姓の末裔の一人であり、「永」の名乗頭をもつ方々には、親近感を持っている。毎年行われる三月の清明祭や七月の七夕には一門が一堂に集い、元祖（大宗）「永展」とはどういう人物なのか、また一門の人々とどういうつながりがあるかなどが必ず話題となる。

大宗永展は、字川平の字根家で生まれたといわれている。「オヤケアカハチ・ホンカワラの乱」（一五〇〇年）の際に琉球王国に忠誠を誓い勲功があった。乱後は地方豪族とし

神田貝塚の発掘（1962年）
（写真提供：リチャード・ピアソン氏）

三上次男先生を囲んで（西表島成屋遺跡にて－1980年2月）

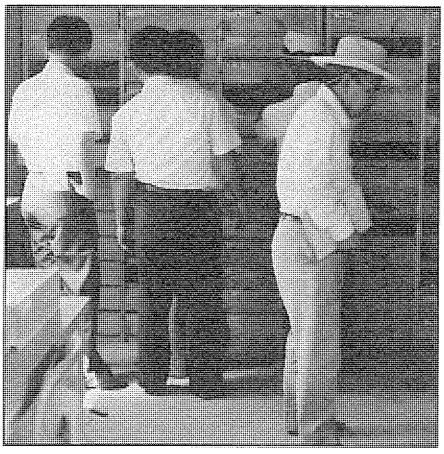
て権勢を誇った。その後、子孫は先祖の功労もあって士族＝系持（ユカラ・ピィトゥ）に抜擢され嘉善姓の系図・家譜をもつようになる。大宗永展は正徳年間（一五〇六年～一五二一年）に首里大屋子（嘉平頭）になっているが、八重山のキリシタン事件（一六二四～一六四二年）の為か、「嘉善姓一門家譜」以外の古文書には登場しない。

「喜舎場永珣資料展」を機会に嘉善姓一門の系図を作成しようと調査を始めた。まず地元や沖縄本島の電話帳から「永」を名乗っている方々を抜き出し、電話や手紙で「八重山出身で嘉善姓一門の者かどうかを確認」して、家譜の有無、屋号名、身内、本家といわれる者の名前などと住所を聞き、村や屋号別に整理した。更に一門の古老達からの聞き取り、位牌調査、そして、それらを照合して屋号別、年代ごとに系統を立てて系図を作成していった。

これまでの系図は、父系血族集団を基に形成されているが、ここでは当然妻や姉妹の名前を記載し、又母系の方でも嘉善姓の者との関係で生を受け、祖を同じくしている者はみんな嘉善姓一門として扱った。ところで調査していくなかで、一門の方が余りにも多過ぎること、家譜を紛失した小宗があったり、島外の島移り（移住）、或いは除籍簿が直系の親族しか申請できないことや、費用のかかり過ぎることなどもあり調査は困難を極めた。

この一門の系図は本家より分岐してきた親族の広がりを示すもので、これを完成することは至極困難なことであり一朝一夕では目的を達成するのは不可能である。そこで、まず中間発表として、『喜舎場永珣生誕百年記念論文集』に「嘉善姓一門の系統と八重山のキリシタン事件[13]」を寄稿した。さらにその後、資料を追加し、内容にも検討を加えて集成し、大宗永展生誕五三〇年の節目である一九八八年に『嘉善姓一門と八重山の歴史[14]・嘉善姓一門世系図』を自費出版した。

先島文化研究所の開設（1978年７月）



私はこの嘉善姓一門の系図を作成しながら――自己の存在を確認し、大宗を起点にこれまでの先祖代々の活躍と功績を知ることによって先祖への感謝の気持ちと誇りを抱き、これからの私の生活を新たにしていく――そんなことを考えていた。[15]

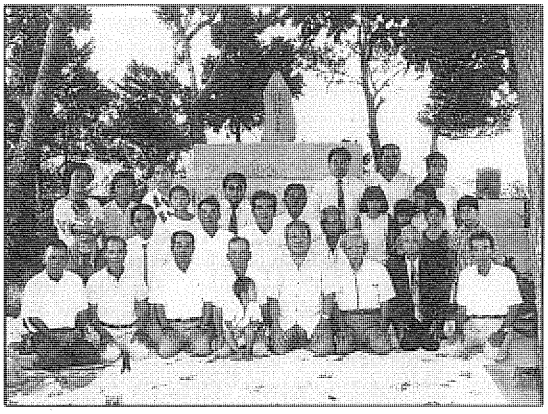
石垣小学校の校庭で石斧を拾ってから四〇年、考古学とは縁が切れない関係になってしまった。筆者の脳裏には、常に八重山の先史時代の赤色土器時代や無土器時代、歴史時代萌芽期のスク時代などの歴史と文化を解明したいという願望が焼きついている。常日頃から暇を見つけては、八重山の各島々をフィールド踏査しながら遺跡や遺物などに直かに触れてきた。

我が八重山諸島は、その独特な自然や文化のみならず、日本の南島の最南端に位置し、日本文化のルーツのなかでも黒潮文化、あるいは南方文化の伝来の海上ルートの表玄関として、民俗学者柳田國男先生や考古学者金関丈夫先生・國分直一先生らの研究によって注目されてきた。この八重山諸島は、民族移動や交流ルートの架橋として波状的に伝播してきた幾多の異質文化を受容してきたとの仮説に基づいて研究が進められて来たのである。

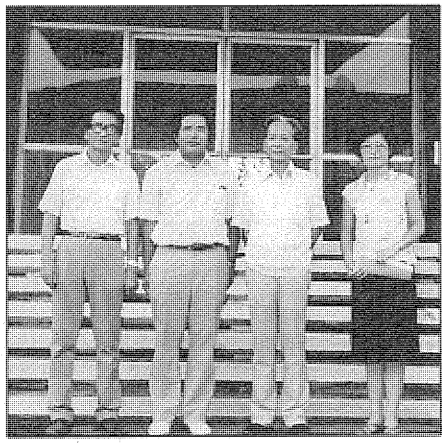
即ち、八重山諸島の先史時代の赤色土器文化、無土器文化、原史時代のスク文化は、小さな島々であるがゆえに、時には文化の断絶を伴いながらも外来文化と土着文化が複雑に絡み合い形成されてきたのである。

これらの先史時代の赤色土器文化、無土器文化、及び歴史時代萌芽期（原史時代）であるスク時代の文化には、大陸的な文化要素や南方的な文化要素、北方的な文化要素などを見出すことができる。ただ、複合遺跡が少ないことや包含層（当時の生活層）が薄いこと、さらには小片が多く土器などの型式分類がむつかしいことなどが研究の障壁となっている。従来の考古学的な思考方法だけでは八重山の先史時代の文化の解明は困難である。

現在、当地八重山においては、開発ラッシュによって文化財保護法に定める基本的な最



七夕に集いて親族一同（大宗永展の墓前にて－1988年）

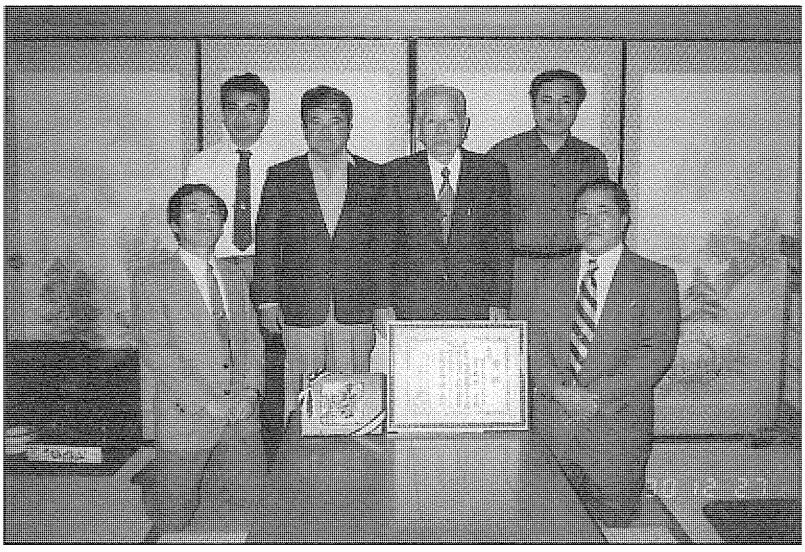


劉茂源先生　筆者　宋文薫先生、連　照美先生（台湾大学にて－1980年８月）

低限度の記録保存さえも守られていない。何の策をも打たれぬまま次から次へと遺跡が破壊され、闇から闇へと葬り去られた事例が数多くある。いったん破壊された遺跡の復原はほとんど困難であり、失われた埋蔵文化財を再現することは不可能である。そのような状況では、私たちは八重山の先史時代、歴史時代の文化の解明や、沖縄、ひいては日本の文化の解明に大きな空白（欠落）を残すことが明らかである。遺跡から発見される土器片や陶磁器片などの一見些細なものたちによって私たちの祖先の文化や民族のルーツが解明される場合が往々にしてあるのである。たとえ一片の土器片でも、小さな貝塚や遺跡であっても、私たちはそれを大切にし、調査し、記録保存してゆかなければならないのである。

一九九五年は私にとって五〇歳の節目の年であった。学兄の石垣繁八重山文化研究会会長から「これまでの論文を一つにまとめたら」と言われた。そこで、筆者の頭の中身を整理する意味でもここらへんでひとつ八重山の考古学についてまとめてみようかという気になった。先学諸氏の成果を踏まえながら八重山の先史の赤色土器時代や無土器時代、歴史時代萌芽期のスク時代の歴史と文化について考えてみた。その成果が本書の刊行のきっかけとなったのである。早速仕事にとりかかり、これまでの論文をまとめて國分直一先生にお見せしたら「読みづらいので年代ごとにまとめ直したら」と言われた。最初はその意味が理解できずにいたが論文を年代を追って読み返してみたら、余りにも重複の多いのに気がついた。どうすれば、うまくまとまるかと頭を悩ませていた時、折しも地名研究会の発足で来島した民俗学者谷川健一先生にお会いすることができた。そこで本の出版について相談したら、「最初が肝心だ。一年間寝かせなさい」といわれた。

この四年間、國分先生、高宮先生や谷川先生、その他たくさんの学友のアドバイスに基づいて本書の書き直しなどを進めてきた。本書が体裁を成したのも、ひとえに皆様の暖かいご協力のお陰である。

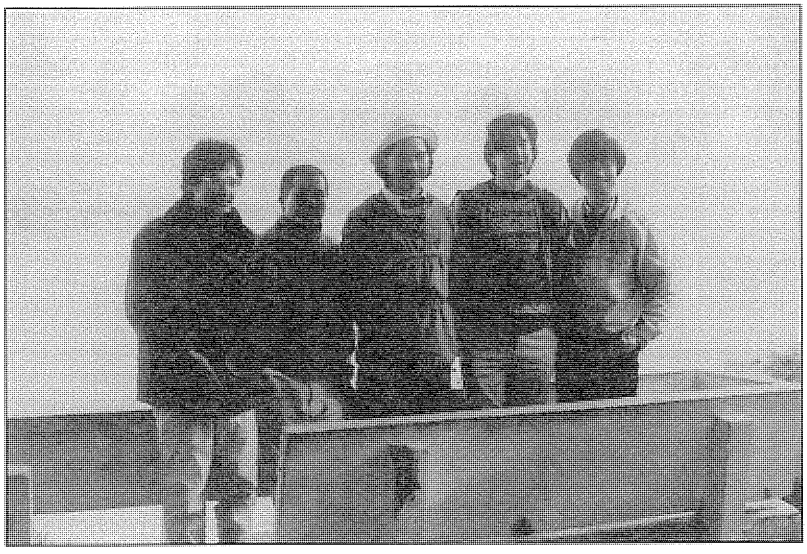


郷土史家　牧野清先生を囲んで

本書が、八重山の先史時代解明の一助になれば幸いである。また、私は八重山の先史文化の問題点については、これから共同研究や討議を重ね、また学術的な発掘調査をするなかでそれらを解決する手がかりを摑むことができるし、ひいては複雑な様相を見せる八重山の先史文化の解明ができると考えている。

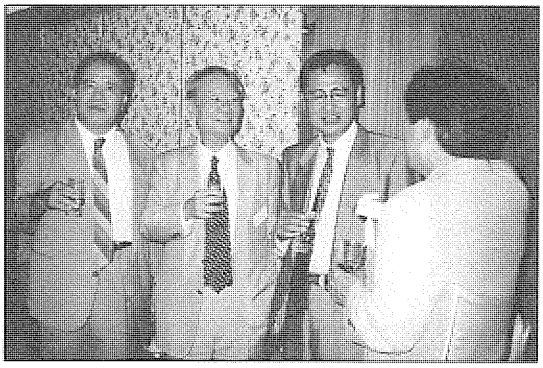
なお、本書をまとめるにあたって、國分直一先生をはじめ、高宮廣衛先生から序文をいただいた。また、本書には学兄の新田重清氏、安里進氏、関口廣次氏、谷川章雄氏、中沢富士雄氏、牛沢百合子氏との共著も含まれ本書への転載をご快諾いただいた。沖縄県教育委員会、石垣市教育委員会、与那国町教育委員会、竹富町教育委員会、宮古の多良間村教育委員会、城辺町教育委員会、徳之島の伊仙町教育委員会、早稲田大学八重山学術調査団、青山学院大学八重山調査団、東京国立博物館など、関係図書の発行元は、図版・写真等の掲載許可を快諾して下さった。各機関に厚く御礼を申し上げる。

先島（八重山・宮古）の先史時代第一期（赤色土器時代）の源流については、台湾考古学関係報告書（卑南遺跡・墾丁寮遺跡・鵝鑾鼻遺跡）から出土の土器、石斧、貝刮器等の写真掲載を許可して下さった台湾大学の宋文薫先生、連照美先生、李光周先生らに感謝したい。また、張光直博士の和訳『鳳鼻頭、大坌坑遺跡と台湾先史学』からの図版再版の件に関して「イェール大学人類学部（コネッチカット州　ニューヘイブン）のイェール大学人類学関係出版物使用許可取得済み」の許可を快諾して下さった著者の張光直博士やイェール大学のウィリアム・ケリー会長やレオポルド・ポスピシル編集長、そしてまた交渉にあたってくださった学兄のブリティッシュ・コロンビア大学の人類社会学部リチャード・ピアソン教授のご厚意に深謝したい。さらに、先史時代第二期（無土器時代）との源流についても、ロバート・フォックス博士著の和訳『タボン洞穴群の考古学的調査』の図版掲載に関しては、フィリピン国立博物館館長ガブリエル・カサール神父、考古学部門部長ウィ



仲筋貝塚の発掘調査を終えて（1980年1月）

ルフレド・ロンキリオ氏にお世話になりました。記して感謝申し上げます。
写真等の撮影についてはW・I・O考古学研究グループの一員であった内原英和氏からご教示を受けた。また、石垣繁氏、伊波寛氏、大呑善晃氏、玉津博克氏、松本貢氏からは、編集上の構成内容の指摘、校正などのご教示を受けた。沖縄国際大学在学の愚息（大濵永寛）は、写真の撮影整理等にアシスタントになって協力してくれた。そして最後に、印刷をお引き受け下さった大里印刷の崎山用照氏に対し謝意を表したい。紙数の都合でいちいち名前を挙げることができないが、その他にも多くの方々のご理解とご協力を得たことを付記して感謝する次第である。



日本考古学協会第64回総会後の懇談会にて。
中央は高宮廣衛先生、右側に関口廣次氏（1998年）

國分直一先生を訪ねて（1996年）

崎枝赤崎貝塚にて。中央は、フィリピン国立博物館エヴァンゲリスタ副館長、左側に青柳洋治先生、小川英文氏、右側に筆者、安里嗣淳氏（1988年）